公益財団法人 日本骨髄バンク 臨時理事会 議事録

1　日　時　　2023 年（令和 5 年）1 月 13 日（金） 17 時 10 分から 18 時 20 分

2　開催方法　　ＷＥＢ会議
（本会議を WEB 開催することに関して全理事の同意を得た）

3　定足数

（１）出席理事 ： 14 名 / 現在数 14 名（以下五十音順、敬称略）
小寺 良尚（理事長）、岡本 真一郎（副理事長）、佐藤 敏信（副理事長）
浅野 史郎（業務執行理事）、加藤 俊一（メディカルディレクター）
石丸 文彦（理事）、鎌田 麗子（理事）、鈴木 利治（理事）、瀬戸 愛花（理事）
高橋 聡（理事）、橋本 明子（理事）、日野 雅之（理事）、福田 隆浩（理事）
三田村 真（理事）
注）定款第 46 条に規定する理事現在数の過半数を充足し、本理事会は成立した。

（２）欠席理事 ： 0 名

（３）出席監事 ： 2 名
椙村 岳央（監事）、藤井 美千子（監事）

（４）陪 席 者 ： 2 名
山崎 翔（厚生労働省健康局難病対策課移植医療対策推進室室長補佐）
石川 理矢子（厚生労働省健康局難病対策課移植医療対策推進室係長）

（５）事 務 局
小川 みどり(事務局長兼医療情報部長兼広報渉外部長)、田中 正太郎（総務部長）
中尾 るか（ドナーコーディネート部長）、関 由夏（移植調整部長）
渡辺 良輝(広報渉外部長代理)、戸田 泉（ドナーコーディネート部ＴＬ）
竹村 肇（総務部）、上原 淳（総務部）

4　開　　会

小寺理事長が臨時理事会の開会を宣言した。理事会運営規則第 3 条に基づき、事務局の出席が認められた。

5　議事録署名人の選出

定款第 51 条第 2 項により出席した理事長及び監事が議事録の署名に当たるとされた。

〔 議 事 〕

6　報告事項

1. 骨髄バンクからの発信：「伝えたいこと」
2. 第 21 回コーディネーター養成研修会　認定委嘱審査の実施および審査委員の変更について
3. 調整医師の新規申請・承認報告
4. 寄付金報告
5. 移植件数報告

7　報告事項の経過概要と結果（敬称略）

1. 骨髄バンクからの発信：「伝えたいこと」

小川事務局長兼医療情報部長兼広報渉外部長が資料に基づき説明した。

バンクの喫緊の課題のひとつ「ドナープールの高年齢化」については、年齢の山が50歳くらいになってしまっている。今は新規ドナー登録者の純増が毎年約5000人であるが、約3年後以降は純減5000人に変わる。55歳でドナー登録を卒業する人たちが毎年2万5000人になるからである。先生方に様々解析していただいた結果、私たちは若年層のドナー登録者を年間あと1万人プラスして増やさなければならない。今は毎年2万人の30代以下のドナーが新規登録してくださっているがそれでは足りない。あと1万人、合計3万人の30代以下のドナー新規登録者を増やさなければいけない。こうした課題があるが、「何に困っているのか、何をして欲しいのか」を世間に対して直接的に端的に伝えることが重要なのだが、私たちは今まで明確には伝えてこなかった。今後はそこを繰り返し発信して世間の人たちが持っている「骨髄バンクは何とかなっているのではないか」というイメージを変えて行かなければならない。

具体的に何を伝えたいかである。まず1つ目は、移植率が低い。バンクドナーから移植を希望している患者の内、約半分しかバンクから移植を受けられていない。2つ目は応諾率が低い。ドナーが見つかっても次々に脱落して中々提供に至らない。3つ目は若年ドナー不足。先程説明した通りである。4つ目は若者の認知度が低い。世論調査によると骨髄バンクを内容も含めて知っている18歳から29歳は14.2%と相当低い。

次に、どのように伝えていくか、伝える方法である。これまでは主にテレビ・ラジオ、新聞・雑誌・書籍などのオールドメディアに頼って来た。日本中の色々な世代の人に向けてバンクを知ってもらうという意味ではテレビや新聞も重要である。一方、SNSで骨髄バンクを知ったという人は1.9%に留まっている。若い人たちに共感していただく、骨髄バンクを知っていただくためにはやはりSNSが重要である。今後はテレビだけではなく、より一層SNSでの発信に力を注いで行く。これまでは献血人口を主眼とした広報活動を行ってきたが、SNSを有効活用し、これまでの広報活動でカバーできなかった層へ骨髄バンクの情報を発信し、認知度向上とドナー登録の呼びかけを行おうとしている。例えばTwitterのSNSのフォロワー数を増加させることでより一層広告費をかけたのと同じような効果が得られると期待している。社会全体、特に若年層への骨髄バンク事業の認知度向上を目指している。

（主な意見）

＜小寺＞　今このようなことをやろうということで、ホームページを始めとする色々なところ、それこそSNSなのだがこのようなことでバンクは困っている。困っているから努力しているということを発信して行くということか。

＜小川＞　はい、外に向けてのアピールは本当に重要だと思っている。そこに注力して行きたい。

＜小寺＞　例えばオールドメディアじゃなくてSNSにシフトしてやって行くという指針が正しかったどうかということについては1年後に中間総括をするというか評価することになるのか。

＜小川＞　はい、そうなる。

＜加藤＞　時代の流れとして当然のことだと思っているが、評価の方法としてどのようなことを考えているか。

＜小川＞　1番分かりやすいのは30代以下のドナー登録者数の増え方とSNSのフォロ

ワー数の増加である。

＜加藤＞　そのような基礎データが必要になるがそれが直接どのように結びついたかというところ、そこの検証は中々難しいと思う。私も具体的にはないのだが、もう一工夫必要なのではないかなと感じている。100 万人近くが視聴した福田班で作成した YouTube 動画がある。私も意見交換をしたが、実際にどれほど効果があったのか検証するのは難しい。福田班のビデオは 2 回ほど一斉にアナウンスをかけて、それに呼応するような形で 2 回ほど大きな波が来ているが、その間は意外と反応が見られていない。他の類似のバンクのビデオは同じ山の所で次にリンクして見ている人はあまりいないように見えた。やる時にどのように評価していくかということは事前に考えて置かなければいけないのかなと感じている。

＜小寺＞　1 年後の若年ドナー数の増加、それから実際にその人たちを介した造血幹細胞移植数の増加が最終的な評価になる。厳しいようだがそれを目指してやって行きたい。

＜橋本＞　SNS を使うというのは当然のツールであろうと思いながら聞いていた。SNS を使うというのは社会全体がそうなっていると思う。私たちのような患者に情報発信する立場でもこの 5 年間は SNS を使わない手はないのでやって来ている。参考になるかどうか分からないが情報発信で、白血病で情報発信するのとリンパ腫で発信するのと MDS で発信するのとでは、同じ費用をかけてもリアクションは MDS が抜群に高い。それは私達がやるというよりも SNS のツールそのものが選んで配信するのでどうやってターゲットにするのか分からないが、おそらくニーズがそこにあるのだろうなとしか判断のしようがない。例えば白血病で発信したのと、MDS で発信したのとでは 10 倍から 20 倍にリーチ数が跳ね上がる。これはプロがやればそこにどんどんターゲットして行けるのだと思う。プロを使うのが当然だと思うのだが、今までの事務局の体制にプラスαでプロを入れていくのか。それともそこを大きく変化させて取り組んでいく準備が進んでいるのか。

＜小川＞　チームを組んでやり始めている所である。色々な準備を重ねて 1 月以降に計画を立てて配信している。プロの方という点ではドナー応諾率向上ＷＧの顧問として SNS に長けた方に 11 月から入っていただいてアドバイスをいただきながらやっている。

＜橋本＞　予算配分も変わってくると思うが期待している。

＜福田＞　加藤理事や橋本理事が言われたことに賛成である。SNS に変えていくというのは若い人にアピールする上で必須のことだと思う。検証して増えていないからやめるというスタンスではなく、ガクンと減ってなければもうこれに切り替えていこうと考えても良いと思っている。YouTube 動画でも若い人の登録数が増えないかと期待したが、数は大学での勧誘イベントの影響の方があったのかもしれない。あの動画はどちらかというと数全体を上げるというよりは進みやすいタイプのドナーに気づいてもらって、進みやすい若いドナーの率を上げるというのが 1 番の目的で 1 ポイント 2 ポイントその時点で数が上がったというよりは、長期的に繰り返していかなければならないことなのかなと思う。検証は継続的に進めながら長い時間はかかるだろうなと思う。SNS に切り替える方

向は基本路線として考えて良いと思う。

＜小寺＞　たしかに福田理事の言う通りであって近視眼的に見るということがないように、しかし評価は毎年しながら行きたい。

2.　第21回コーディネーター養成研修会　認定委嘱審査の実施および審査委員の変更について

中尾ドナーコーディネート部長が資料に基づき説明した。

コーディネーターの養成研修会を今年度も実施している。何度もお伝えしているようにコーディネーターの年齢が上がっていることによって体調を崩す方、体力に自信がない方が増えている。そのような中で今回も必要ということで全7地区、現在受講者24名で研修会を実施している。既に中間試験まで終わったところで実地研修などを経て 4 月上旬の認定審査会で認定となる予定である。現在活動中のコーディネーターについては本年度すでに再認定しているところだが、今回は、5 年間満期の認定ではなく、その方の事情やスキルに応じて1年間のみの認定とした人が3名いる。この3名の審査もある。この 2 つの審査を今年 4 月に実施する予定である。審査をしていただくにあたっての審査委員について、小林正夫先生は長年、委員をお願いしている先生である。昨年度新たに入っていただいた文教大学人間科学心理学科教授の城先生が体調不良により続けるのが困難であると申し出があり辞退となった。4 月の認定審査に間に合うようにもう 1 人審査員を検討した。近年コーディネーターの審査に関しては一人一人のコーディネーターの資質をしっかりと検討して行くようなケースがあり、審査の先生方には適切な指導の在り方にもアドバイスをいただき進めている。そのため審査委員の先生は、コーディネーターの事情、コーディネート現場、コーディネーターのスキルに必要なことは何かというところに精通している方という観点から考えた時に、スーパーバイザーと兼任になるが、坂田薫代さんにコーディネーター委嘱審査委員に就任いただきたいと考えている。委嘱審査委員の任期は2年であるが、坂田さんには2023年度の認定審査を依頼し、以降の審査委員としての活動については改めて相談としたい。

（主な意見）

＜小寺＞　坂田さんはかつてバンクの職員でドナーコーディネート部長をされていた非常に経験豊かで人格的にも優れた方だと思う。小林先生と坂田さんの 2 人で委嘱審査会議を開くということになるのか。

＜中尾＞　はい、そのようになる。

＜小寺＞　応募総数が112名いて32名が受講対象とすごい落差であるがこれはどのようなことか。

＜中尾＞　今回周知の部分に力を入れて各新聞紙上に紹介いただいた。そのような中で関心を多く持っていただいたが紙面上で伝えられなかった点としては待遇面である。これが仕事として生活が成り立つような収入ではないというところの誤解が非常に多くて、今まさに仕事をしておられる 20 代～40 代の方々が仕事をやめてこちらに来たいというご意向であった。そのような方々に問い合わせをして「バンクのコーディネーターというのはこのような待遇です」と話をすると「無理ですね」ということになるのがほとんどである。

＜小寺＞　給料が安いということか。

＜中尾＞　仕事として成り立つ形ではないということである。
＜小寺＞　全国のコーディネーターの総数としては、最終的に24名全員認定されるとして前年度から増えるのか減るのか。
＜中尾＞　増える。一方で在席はしているが、体調不良でお休みしている方も結構いて、活動できる人数は24名が純粋にプラスという形にはいかないと思っている。少なくとも今よりは動ける人が増えると見込んでいる。
＜小寺＞　遠い将来のことを考えればリモートによるコーディネートとかコーディネートの簡略化など色々な課題が実現していった場合には現在のコーディネーターの数が必要かどうかという問題にも直面すると思う。新しい人に入ってもらう時にはそのことも考えながら慎重にやっていただきたい。

3.　調整医師の新規申請・承認の報告

中尾ドナーコーディネート部長が資料に基づき説明した。

令和4年12月1日から12月31日の期間に新たに申請・承認された調整医師の人数は3名、異動・辞退は1名、合計1217名である。

4.　寄付金報告

渡辺広報渉外部長代理が資料に基づき説明した。

12月は件数1939件、金額2249万3263円の寄付をいただいた。昨年12月スポット的に大きな寄付があっということもあり、それと比較すると少なく感じるが傾向としては、楽天銀行、ホームページからのＹａｈｏｏ！募金の寄付の件数が増えている。バンクニュースの発送がいつもよりも数日遅いスケジュールになったためもしかすると出足が鈍い部分があるかもしれない。今月に入ってから遺贈等まとまった寄付が入って来ている。

（主な意見）
＜福田＞　カタログギフトで骨髄バンク寄付というのがあった。調べてみるとリンベルというところだけみたいである。そこからの収入は分かるのか。他の会社にもアピールして載せてもらうのはどうなのかと思った。
＜渡辺＞　リンベルは歴史が長くて10年以上バンクへ寄付を入れてくださっている。すごい金額が多いということはないが細く長く堅実に寄付をくださっている。
最近他のカタログ会社からもそのような引き合いがあったが、まだ実現に至っていない。
＜福田＞　カタログギフトを見ているとあまり欲しいものもないし、そこに骨髄バンクに寄付というのがアピールできれば少しずつ増えて行くのかなと思った。

5.　移植件数報告

田中総務部長が資料に基づき説明した。

2022年4月から12月末までの件数は国内ＢＭが544件、国内ＰＢ233件、国際が3件で合計780件である。予算対比65％で引き続き厳しい状況である。

以　上